

## 論 文 要 旨

音楽による共生 -音楽療法場面の分析解釈から-

山本（生野） 里花

本論の目的は「人と人が音楽を介して時間と場を共にする」とき、どのようなことが起こり得るのかについて、その概念の一側面を提示することである。その方法として、6年間にわたる単独の音楽療法症例の中から三つの特徴的場面を取り上げ、療法士と対象者の関係について、その状況、状態、行為を精査した。三つの場面は、この症例に関する先行研究をふまえて選択された。研究手法は、「症例独自の研究」、「一人称研究」、「エスノグラフィー研究」、「症例研究」の要素を取り入れたオリジナルの方法であり、個々の参加者の行為を並列して示した上で、そこに浮かび上がる関係について段階を追って解釈を深め、ひとつの結論を示すものである。諸段階を通じ、療法士の視点による解釈を一貫して用いたが、それは、長期にわたる本症例のコンテキストに立った解釈が可能になること、関係の当事者としての内側からの視座が可能になることという利点による。

第1部「三つの臨床場面で起きていたことの検証」では、それぞれの場面について、ビデオ記録とセッション記録に基づき、各参加者の行為を時系列で並列した記述；療法士(Th.)、対象者(C1.)、アシスタント(As.)のやりとりを、譜例の引用とともにTh.が解釈した叙述；叙述に現れたそれぞれの参加者が繰り返す音楽相互行為の抜き出しと分類及び解釈；各場面における参加者間の関係の概観の図化と解釈を行った。その結果、Th.とC1.の関係を構成する概念が以下のように導きだされた。

まずひとつ目の場面「《Kちゃんの太鼓》による合奏」では、合奏を媒体とする中でTh.とC1.の間の違和感が浮き彫りになる様、各々が演奏を変化させることで相互に調整を始める様、最終的にふたりが音楽を「共有」し始める様を示された。ふたつ目の場面「《カリヨン》による合奏」では、C1.の音楽行為が切迫した内発的必然性を伴っていることにTh.が気づく経過、それによって関係の主体の重心が変化し、音楽がC1.独自の時間の流れを保障する媒体となり、参加者間のプロセスの矛盾や迂回を抱き込むようになる様を示された。さらに三つ目の場面「打楽器即興」では、Th.がC1.の音楽行為を俯瞰してその世界の成り立ち方を「枠取り」し、そこに自ら足を踏み入れて行為することで、場が寛容さを伴った「あたたまり」を獲得すること、そしてふたりがポリフォニーの一声部として「発言的」演奏と「相手となる」演奏を入れ替わりながら音楽の共同創成者となっていく様を示された。

第2部「本症例が示す『音楽による共生』の様相」では、「相互関係」と「音楽」が密接に結びつく「音楽による共生」という視座を規定し、第1部の三つの場面を俯瞰して論じた。まず、この

共生において互いに引き出されたTh.、C1.各々の独自世界の在り方を、Th.の視点から整理し、解釈した。その結果、C1.の独自世界は「求心的で自己完結的な成り立ち」、「生きる上での必要と直結した自発性」、「自己治癒的側面を内包していること」として現れ、それに対するTh.の独自世界は、「C1.への『認識』を自らの行為の起点とすること」「そのC1.像を常に修正し続け、C1.の世界の成り立ち方の仮説を立てること」「C1.と実際に共有している時間と場のコンテクストを優先し、自らの行為を進行形で変化させること」「音楽行為を双方向の伝達、関係の経験の統合、新しい関係構造の提案の媒体とすること」「一個人としての在り方を起動してかたわらに居ること」のように現れていた。

以上の議論を総合的に捉えて、このTh.とC1.の「音楽による共生」のあり方を、「音楽を共有する関係構造」「相互に変化させられること」「『地場』を創成し、そこに『住まう』こと」という三つの視点から論じた。まず、この症例で一貫して目指されている「音楽を共有する関係構造」によって音楽構造と関係構造が重なり「音楽共生構造」となること、ふたりの間で多様な「音楽共生構造」の諸形態が経験されることによって、その関係が強められることが示された。次に、「相互に変化させられること」では、内発的必然性を伴うC1.の音楽行為がTh.の音楽行為に影響を与え、Th.の音楽行為もまた内発的なものを含んでいく過程、それによって双方ともが、関係において「変化させられていく」存在になることが例示された。最後に、「『地場』を創成し、そこに『住まう』こと」では、上述の二態を布石として、Th.とC1.は音楽構造と関係構造が共時的に生み出す「地場」を音そのもので創り合っていく立場になること、そして「地場」の内側に自らを託すことによって対等な関係を築くことを論じた。

結語では、まず音楽療法のいくつかの既存理論を借りて、本論の立ち位置を確認した。次に、本論で見いだした「音楽による共生」の諸概念を「音楽を生きること」「自他の独自世界に立ち会うこと」「個と個の延長線上にある『地場』が相乗的に強まること」「『地場』の活性化における『共的意味深さ』と『恒常的变化』のはたらき」「価値観の無効化」という側面から論じた。さらに「『音楽による共生』のファシリテーターの役割」と「療法的事象としての三場面の経時性と遍在性」を基底として、音楽療法領域への三つの展望的問い、「療法において対象者が変化する『時』や『状況』についての主体者は誰か」「音楽に対する制御機能からの音楽療法士の解放を、職域においてどう位置づけるか」「療法士と対象者が相互に変化することをケア専門職の一部分としてどう定義するか」を挙げた。最後に、本論で見いだした「音楽による共生」の考え方の、音楽活動全般への応用の可能性について示唆した。